

〈論 文〉

〔学生精神衛生研究班〕

大学生生活の過ごし方のタイプとその 心理的特徴についての検討

都 筑 学 早 川 宏 子
村 井 剛 早 川 みどり
金 子 泰 之

要 約

本研究では、本学大学生 1,146 名を対象に、大学生生活の過ごし方に関する異なるタイプを抽出し、そうした学生たちの特徴を明らかにするために、大学生生活充実度、対人関係意識、時間的展望、自尊心、不定愁訴との関連性を検討することを目的とした。溝上 (2009)⁴⁾ の大学生生活の過ごし方尺度を用いてクラスター分析によって検討したところ、限定的対人活動群、発展的対人活動群、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群、全般的活動群という 6 つの異なるタイプの学生がいることが明らかになった。限定的対人活動群と発展的対人活動群は、友人・クラブ・サークルなどの対人交際を中心に大学生生活を過ごしている点が共通していたが、発展的対人活動群の方が限定的対人活動群よりも、対人交際を含む全体的な活動範囲が広い点が異なっていた。ヴァーチャル活動群は、直接的な人間関係よりもインターネット・マンガ・ゲームなどのメディアとの親和性が強い点が特徴的だった。自主的勉強群は、他者との活動をおこなうよりも、自分の目標を目指して一人でコツコツと勉強する方を好むようなタイプであった。消極的活動群と全般的活動群は、大学生生活においてバランスを取って過ごしている学生である点で共通していたが、全般的活動群の方が消極的活動群よりも、積極的に活動をおこなっている点が異なっていた。さらに、これらの 6 つのタイプの学生は、対人関係意識や時間的展望などの指標に関しても、それぞれのタイプに固有な特徴的な傾向を示していた。

1. 問題と目的

従来においてわれわれは、日常生活におけるさまざまな活動が大学生の精神衛生に及ぼす影響に注目して研究をおこなってきた。特に、一日の生活時間の配分や重視する活動が大学生の健康意識や身体意識に及ぼす影響を及ぼすかについて検討してきた。

都筑・舟橋・八島・早川・村井・早川・半澤 (2009)¹⁾ は、睡眠・食事・運動・休養という

4つの活動の重要度配分のタイプを検討した。その結果、睡眠・食事重視群、活動バランス重視群、睡眠重視群、睡眠・休養重視群の4つがあることを見出した。睡眠・食事重視群や活動バランス重視群は、健康管理や運動に日頃十分に気をつけ、食生活のバランスやリズムにも配慮していることが示された。他方で、睡眠・休養重視群は、4タイプの中で運動を重要だと考える程度が最も低く、運動が苦手と避けたいと思う学生が一定程度含まれていると考えられた。

都筑・早川・村井・早川・岡田(2010)⁹⁾は、12の活動(サークル、同好会、部活動、授業、ゼミ、資格のための勉強、アルバイト、インターンシップ、ボランティア、就職活動、友人との交際、趣味の活動)に費やしている時間とエネルギーの程度を指標として、大学生の日常生活の活動実態を検討した。その結果、大学生が重視する活動は、友人との交際、授業、アルバイト、サークル、趣味の活動、資格のための勉強という順番になっていることが明らかになった。また、大学生の生活管理能力に基礎づけられた日常的な規則正しい生活が営まれ、その結果として、主観的な健康感が増大し、身体的な疲労症状が減ることが明らかになった。

こうしたわれわれの問題意識と関係の深いものとして、溝上(2009)⁴⁾の調査がある。ここでは、大学生生活17項目に対して1週間に費やす時間数を指標として、「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・マンガ」「友人・クラブ・サークル」の3因子が抽出された。さらに、クラス分析にもとづいて4つの異なるタイプがあることが示された。タイプ1は、インターネット・ゲーム・マンガの得点だけが平均より高く、他の2つの下位尺度得点が平均を下回る学生である。タイプ2は、3つの下位尺度の得点が平均以下の学生である。タイプ3は、3つの下位尺度の得点が平均以上の学生である。タイプ4は、友人・クラブ・サークルの得点だけが平均よりも高く、他の2つの下位尺度得点が平均を下回る学生である。知識・技能の獲得、将来設計、充実感、学習動機などとの関連の検討結果から、タイプ3は日々が充実しており、かつ大学生活を通じて自分が成長していると実感している学生タイプであると考えられた。

本研究では、溝上(2009)における大学生生活の過ごし方の質問項目を用いて調査することによって、次の2点を明らかにすることを目的とする。第1に、本学において、大学生生活の過ごし方について、どのような学生タイプが存在するかを明らかにする。第2に、大学生生活の過ごし方のタイプと大学生生活充実度、対人関係意識、時間的展望、自尊心、不定愁訴との関連性を検討することによって、そうした異なるタイプの学生の意識的な特徴を明らかにする。

2. 方 法

(1) 調査対象

調査対象者は、中央大学の多摩キャンパスに在籍する学生 1,146 名（平均年齢 19 歳 10 ヶ月，標準偏差 1 歳 1 ヶ月）である。

対象者の性別は，男 663 名，女 459 名，不明 24 名だった。男女比は約 1：0.7 だった。全学（理工学部を含む）の男女比は 2：1 であり，それと比べると女子の割合が高かった。

学年の内訳は，1 年 770 名，2 年 237 名，3 年 86 名，4 年 26 名，不明 27 名であり，1 年生が約 7 割を占めていた。

学部の内訳は，法 235 名，経済 393 名，商 209 名，文 273 名，総合政策 11 名，不明 25 名であり，総合政策を除いて学部の偏りは比較的少なかった。

住まいの内訳は，自宅 618 名，自宅外 503 名，不明 25 名であり，自宅と自宅外の比率は約 1：0.8 であり，現状をおおよそ反映した構成になっていた。

(2) 調査内容

質問紙の構成は，以下の通りである。

① フェースシート

性別，学年，年齢，学部，住まいを尋ねる 5 項目。

② 大学生生活の過ごし方

溝上（2009）が用いた大学生生活の過ごし方の尺度 17 項目。授業，授業外の学習，自主的学習，読書，マンガ・雑誌や新聞を読む，クラブ・サークル活動，アルバイト，同性や異性の友人との付き合い，テレビ，ゲーム，通学時間などについて，1 週間に費やす時間数を（1）全然ない，（2）1 時間未満，（3）1～2 時間，（4）3～5 時間，（5）6～10 時間，（6）11～15 時間，（7）16～20 時間，（8）21 時間以上の 8 段階評定で回答を求めた。

③ 時間の使い方の満足度

Benesse 教育研究開発センター（2009）²⁾ で用いられた日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目。時間の使い方を 100 点満点で評定し，0 点から 100 点までの 10 点刻みの 11 段階の中から選択する。

④ 目標意識尺度

都筑（1999）⁷⁾ が作成した目標意識尺度 35 項目 6 下位尺度（将来への希望，将来目標の有無，

将来目標の渴望, 空虚感, 時間管理, 計画性) からなる項目に対して, 「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの 5 件法で回答を求めた。

⑤ 大学生生活充実度尺度

奥田・川上・坂田・佐久田 (2010)⁵⁾ が作成した大学生生活充実感尺度 39 項目 4 下位尺度 (フィット感, 交友満足, 学業満足, 不安) の中から, それぞれの下位尺度において因子負荷量の高い 3 項目ずつを選択し, 合計 12 項目に対して, 「1. 全然当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

⑥ ソーシャルスキル尺度

相川・藤田 (2005)¹⁾ が作成したソーシャルスキル自己評定尺度 35 項目 6 下位尺度 (関係開始, 解説, 主張性, 感情統制, 関係維持, 記号化) の中から, それぞれの下位尺度において因子負荷量の高い 3 項目ずつを選択し, 合計 18 項目に対して, 「1. 全然当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

⑦ 対人依存欲求尺度

竹澤・小玉 (2004)⁶⁾ が作成した対人依存欲求尺度 20 項目 2 下位尺度 (情緒的依存欲求, 道具的依存欲求) の中から, それぞれの下位尺度において因子負荷量の高い 3 項目ずつを選択し, 合計 6 項目に対して, 「1. 全然当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

⑧ 自尊心尺度

Rosenberg の自尊心尺度の邦訳版 10 項目 (都筑・舟橋・早川・八島・早川, 2006)¹⁰⁾ を用いて, 「1. 全然当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

⑨ 不定愁訴

都筑 (2009)⁸⁾ が用いた不定愁訴を尋ねる 8 項目に対して, 「1. 全然ない」から「5. よくある」までの 5 件法で回答を求めた。

⑩ 友人とのコミュニケーション内容

古谷・坂田 (2006)³⁾ が作成した遠距離友人とのコミュニケーション内容尺度 9 項目 3 下位尺度 (課題的コミュニケーション, 情緒的コミュニケーション, コンサマトリイ的コミュニケーション) からなる項目を用い, 友人とのコミュニケーションの程度について「1. 全然ない」から「5. よくある」までの 5 件法で回答を求めた。

(3) 調査期日

2010 年 11 月 5 日～19 日

(4) 調査手続き

質問紙に回答するかどうかは自己決定できることを伝えた上で、授業時間内に質問紙を配布して調査を実施した。

〔都筑 学〕

3. 結果と考察

3.1 大学生生活の過ごし方のタイプ

大学生生活の過ごし方 17 項目について主因子法，プロマックス回転による因子分析をおこない，固有値 1 以上の 5 因子を抽出した。さらに因子負荷量 .35 以上の項目に対して因子分析を繰り返しおこなったところ，表 1 に示されるような解釈可能な 3 因子が抽出された。

第 1 因子には，「勉強のための本（新書や専門書など）を読む」「授業とは関係のない勉強を自主的にする」「新聞を読む」の因子負荷が高かったので，「授業外の自主的勉強」因子と命名した。第 2 因子には，「異性の友だちと交際する」「同性の友だちと交際する」「コンパや懇親会などに参加する」「クラブ・サークル活動・部活動をする」の因子負荷が高かったので，「対人交際」因子と命名した。第 3 因子には，「マンガや雑誌を読む」「ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする」「インターネットサーフィンをする」「娯楽のための本（小説や一般書など）を読む」の因子負荷が高かったので，「インターネット・マンガ・ゲーム」因子と命名した。

表 1 大学生生活の過ごし方についての因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3
1. 勉強のための本（新書や専門書など）を読む	.830	-.039	-.003
7. 授業とは関係のない勉強を自主的にする	.631	.031	-.056
4. 新聞を読む	.395	-.009	.109
3. 異性の友だちと交際する	.096	.662	-.133
13. 同性の友だちと交際する	-.053	.583	.067
12. コンパや懇親会などに参加する	.065	.473	.006
6. クラブ・サークル活動・部活動をする	-.164	.384	.063
11. マンガや雑誌を読む	-.069	.117	.669
8. ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする	-.065	-.111	.578
2. インターネットサーフィンをする	.236	-.045	.400
15. 娯楽のための本（小説や一般書など）を読む	.200	.070	.394
因子間相関	因子 1	.068	.243
	因子 2		.254

次に、大学生生活の過ごし方のタイプを明らかにするために、3つの下位尺度の合成得点にもとづいて、ward法によるクラスタ分析をおこなった。3～6クラスタを検討したところ、6クラスタが最も適当であると考えられた。

6クラスタを独立変数、3下位尺度の得点を従属変数とする一要因の分散分析をおこなったところ、「授業外の自主的勉強」($F(5, 1055) = 252.98, p < .001$)、「対人交際」($F(5, 1055) = 503.08, p < .001$)、「インターネット・マンガ・ゲーム」($F(5, 1055) = 176.14, p < .001$)において主効果が有意であった。

表2には、それぞれのクラスタにおける3つの下位尺度の平均値とSDを示してある。LSD法による多重比較をおこなったところ、「授業外の自主的勉強」においては、クラスタ4 > 6 > 2 = 3 = 1 > 5 ($p < .05$)という順で平均値が高かった。「対人交際」においては、クラスタ2 > 6 > 1 > 3 = 4 > 5 ($p < .05$)という順で平均値が高かった。「インターネット・マンガ・ゲーム」においては、クラスタ3 > 6 > 2 > 4 > 1 > 5 ($p < .05$)という順で平均値が高かった。

表2 6クラスタにおける大学生生活の過ごし方3下位尺度の得点

	授業外の自主的勉強			対人交際		インターネット・マンガ・ゲーム	
	N	平均	SD	平均	SD	平均	SD
クラスタ1	376	2.08	0.79	4.13	0.66	2.75	0.82
クラスタ2	70	2.39	1.02	6.13	0.81	3.81	1.33
クラスタ3	54	2.13	0.65	2.65	0.67	5.04	0.76
クラスタ4	141	4.24	1.07	2.63	0.84	3.30	1.00
クラスタ5	361	1.84	0.60	2.42	0.67	2.21	0.62
クラスタ6	59	3.85	0.52	4.36	0.58	4.16	0.79

図1には、大学生生活の過ごし方3下位尺度における各クラスタの得点(平均値)を総計得点(平均値)から差し引いた得点を示した。プラス方向は全体の平均よりも相対的に高く、その活動をおこなっている程度が多いことをあらわしている。その逆に、マイナス方向は全体の平均よりも相対的に低く、その活動をおこなっている程度が少ないことをあらわしている。

クラスタ1は、「対人交際」の時間が多いのに対して、「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」は全体平均よりも少なかった。対人交際を中心としながらも、大学生生活の活動がやや限られている群であるといえるだろう。

クラスタ2は、「対人交際」の時間が非常に多く、次いで「インターネット・マンガ・ゲーム」の時間が多く、「授業外の自主的勉強」の時間は平均的であった。対人交際を中心にして、

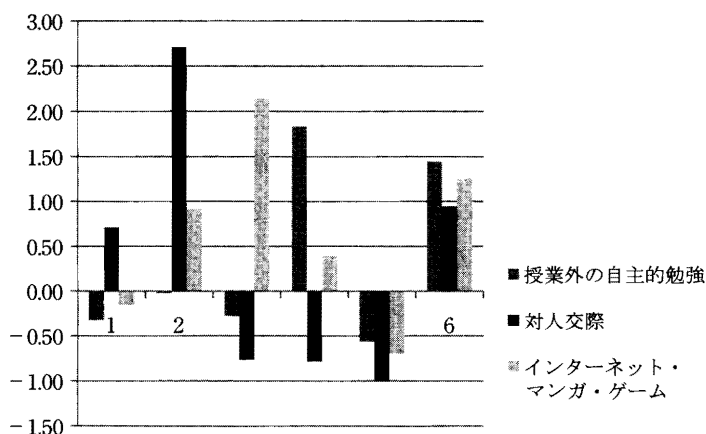


図1 6クラスタにおける得点 (総計得点からの差)

インターネット等に活動にも幅広く従事している群であるといえるだろう。

クラスタ3は、「インターネット・マンガ・ゲーム」の時間が非常に多く、「授業外の自主的勉強」「対人交際」の時間は全体平均よりも少なかった。面と向かった対人的な活動よりも、インターネット等のヴァーチャルな活動を中心的に過ごしている群であるといえるだろう。

クラスタ4は、「授業外の自主的勉強」の時間が非常に多く、「インターネット・マンガ・ゲーム」も全体平均よりも多かったが、「対人交際」はやや少なかった。自主的な勉強を中心に活動している群であるといえるだろう。

クラスタ5は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」のいずれにおいても全体平均よりも少なく、大学生生活における活動自体を活発におこなっていない群であるといえるだろう。

クラスタ6は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」のいずれにおいても全体平均よりも多くなっており、どの活動に対しても全般的に積極的に取り組んでいる群であるといえるだろう。

次に、それぞれのクラスタに属する学生の大学生生活における活動の特徴を明らかにするために、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」の相対的な割合を計算した。その前提として、大学生生活の過ごし方に関して、「全然ない→0時間」「1時間未満→1時間」「1～2時間→1.5時間」「3～5時間→4時間」「6～10時間→8時間」「11～15時間→13時間」「16～20時間→18時間」「21時間以上→21時間」と換算して、各項目の時間数を算出し、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」それぞれの時間数を求めた。表3に示したのが、その結果である。

さらに、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」の時間数を3つの活動の合計時間数で割って、それぞれの活動をおこなっている時間の相対的な割合を求めた。図2に示したのが、その結果である。

図2から明らかのように、クラスタ1と2は3つの活動をおこなっている時間の割合は同じであったが、表1に示されているように、クラスタ2はクラスタ1に比べて、活動をおこなっている時間数が2倍程度多かった。

クラスタ5と6に関しても、図2からわかるように、3つの活動をおこなっている時間の相対的な割合はほぼ類似していたが、表1に示されているように、クラスタ6はクラスタ5と比較して、活動をおこなっている時間数が4倍程度多かった。

以上のような結果を総合的にふまえて、クラスタ1を限定的対人活動群、クラスタ2を発展的対人活動群、クラスタ3をヴァーチャル活動群、クラスタ4を自主的勉強群、クラスタ5を消極的活動群、クラスタ6を全般的活動群と名付けた。

表3 大学生生活の過ごし方6クラスタにおける3つの活動の時間数 (単位：時間)

	授業外の自主的勉強	対人交際	インターネット・マンガ・ゲーム	総計
クラスタ1	1.32	6.56	2.59	10.46
クラスタ2	1.94	13.73	5.84	21.50
クラスタ3	1.37	2.90	9.36	13.63
クラスタ4	6.80	2.88	4.15	13.83
クラスタ5	0.89	2.07	1.48	4.44
クラスタ6	4.82	6.91	6.25	17.98

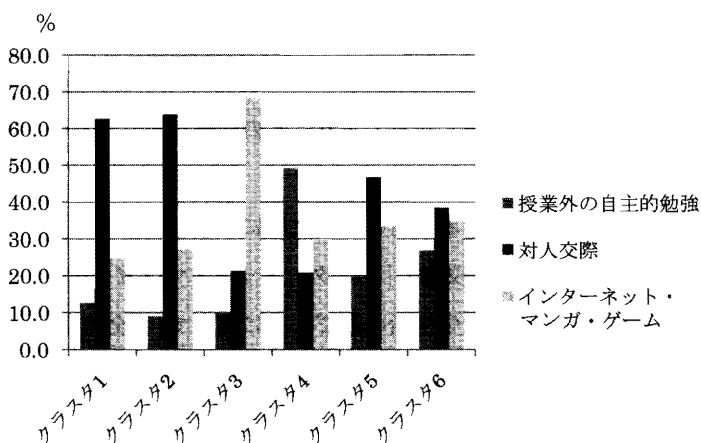


図2 6クラスタにおける活動時間の割合

3. 2 大学生生活の過ごし方のタイプと時間の使い方の満足度との関連

表4に示したように，大学生生活の過ごし方6群における時間の使い方の満足度の平均点は，満足度の高い順に全般的活動群，自主的勉強群，発展的対人活動群，限定的対人活動群，消極的活動群，ヴァーチャル活動群であった。

各群における回答分布を表5に示した．比較的満足度が高いと考えられる7から10に回答する者の割合が発展的対人活動群31.4%，自主的勉強群35.0%，全般的活動群34.5%とそれぞれ30%以上であるのに対し，限定的対人活動群29.4%，ヴァーチャル活動群13.0%，消極的活動群21.7%であった．また，満足度が比較的低いと考えられる1から4に回答する者の割合は，限定的対人活動群29.1%，発展的対人活動群34.3%，ヴァーチャル活動群51.9%，自主的勉強群25.7%，消極的活動群35.8%，全般的活動群27.6%であり，ヴァーチャル活動群の半数以上において満足度が低いことが特徴的であった。

表4の得点にもとづいて，大学生生活の過ごし方6群の間に，時間の使い方の満足度の差があるかどうかを検討した．一要因の分散分析を実施した結果，群の主効果が有意であった（ $F(5, 1045) = 4.30, p < .001$ ）。

LSD法による多重比較を実施した結果，次のことが明らかになった．ヴァーチャル活動群は，限定的対人活動群・発展的対人活動群・自主的勉強群・全般的活動群よりも満足度が有意に低かった（ $p < .05$ ）．消極的活動群は，限定的活動群・自主的勉強群・全般的活動群よりも有意に満足度が低かった（ $p < .05$ ）．限定的対人活動群，発展的対人活動群，自主的勉強群，全般的活動群においては，満足度に有意差は見られなかった。

以上の結果より，ヴァーチャル活動群や消極的活動群は，他の活動群に比べ，時間の使い方についての自己評価が最も低く，消極的活動群はそれに次いで満足度が低いことが明らかとなった．これら両活動群は，他の活動群と比べ，大学生生活の中心的活動要素と考えられる勉強活動面，交友活動面に費やす総合計時間が短いため，一般的な大学生活としての充実感・充足感が得られていないことが起因しているのではないかと考えられる。

限定的対人活動群，発展的対人活動群，自主的勉強群，全般的活動群の間に差が認められなかったことについては，大学生生活として費やされる勉強活動時間，交友活動時間がある一定数満たされることで，中位に満足度が維持されたと考えられる．しかしながら，満足度が中位よりも高くなるかどうかについては，従事した時間に応じた結果が出るかどうかによって左右されると考えられるため，1年生68.9%，2年生21.1%とほとんどの回答者が下級生だったことから，昨今の就職難や将来への不安，大学生としての生活スタイルが確立されていない等の理由で今回は差が見られなかったと考えられる。

表 4 大学生生活の過ごし方 6 群における時間の使い方の満足度得点

	平均値	SD
限定的対人活動群	5.42	1.85
発展的対人活動群	5.50	2.29
ヴァーチャル活動群	4.56	1.99
自主的勉強群	5.59	2.07
消極的活動群	5.03	1.91
全般的活動群	5.62	1.75

表 5 大学生生活の過ごし方 6 群における時間の使い方の満足度比率 (%)

	時間の使い方の満足度										
	0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点	10 点
限定的対人活動群	0	2.4	5.3	8.5	12.8	17	24.2	19.1	7.2	1.6	1.3
発展的対人活動群	1.4	2.9	5.7	7.1	17.1	14.3	20	12.9	10	1.4	7.1
ヴァーチャル活動群	0	7.4	3.7	20.4	20.4	16.7	18.5	7.4	0	3.7	1.9
自主的勉強群	2.1	2.1	2.1	10.6	8.5	18.4	20.6	19.9	8.5	4.3	2.1
消極的活動群	2.2	2.2	4.2	12.2	14.4	20.8	21.1	13	6.4	1.4	0.6
全般的活動群	0	0	3.4	10.2	13.6	13.6	23.7	27.1	3.4	0	3.4

〔村井 剛〕

3. 3 大学生生活の過ごし方のタイプと大学生生活の充実度との関連

まず、大学生生活の充実度の 4 つの下位尺度の信頼性を検討するために α 係数を求めたところ、フィット感 (.70)、交友満足 (.71)、学業満足 (.76)、不安 (.70) となり、尺度の信頼性は十分であると考えられた。

表 6 に示したのは、大学生生活の過ごし方 6 群における大学生生活の充実度 4 下位尺度の得点である。群間に差が見られるかどうか検討するために、大学生生活の過ごし方 6 群を独立変数、大学生生活の充実度 4 下位尺度の得点を従属変数として、一要因の分散分析をおこなった。その結果、フィット感 ($F(5, 1050)=12.32, p<.001$)、交友満足 ($F(5, 1043)=12.22, p<.001$)、学業満足 ($F(5, 1048)=4.84, p<.001$)、不安 ($F(5, 1036)=6.39, p<.001$) において有意な主効果が見られた。

LSD 法による多重比較の結果からは、次のようなことがわかった。フィット感において、限定的対人活動群は、ヴァーチャル活動群と消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。発展的対人活動群は、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。ヴァーチャル活動群は、限定的対人活動群、発展的対人活動群、自主的勉強群、全般的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。自主的勉強群は、発展

表6 大学生生活の過ごし方6群における大学生生活の充実度の得点

	フィット感		交友満足		学業満足		不安	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
限定的対人活動群	3.64	0.80	3.79	0.78	3.06	0.93	3.26	0.88
発展的対人活動群	3.85	0.73	3.97	0.82	2.92	0.93	3.09	0.91
ヴァーチャル活動群	3.15	1.01	3.46	0.88	2.84	1.04	3.10	0.99
自主的勉強群	3.49	0.92	3.33	0.83	3.38	0.93	2.89	0.86
消極的活動群	3.27	0.87	3.46	0.90	2.98	0.91	3.36	0.85
全般的活動群	3.69	0.77	3.75	0.64	3.12	1.06	3.13	0.81

〔早川宏子・早川みどり〕

的対人活動群よりも有意に得点が低く、ヴァーチャル活動群、消極的活動群に対しては有意に得点が高かった ($p<.05$)。消極的活動群は、限定的対人活動群、発展的対人活動群、自主的勉強群、全般的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。全般的活動群は、ヴァーチャル活動群と消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

交友満足において、限定的対人活動群は、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。発展的対人活動群は、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。ヴァーチャル活動群は、限定的対人活動群、発展的対人活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。自主的勉強群は、限定的対人活動群、発展的対人活動群、全般的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。消極的活動群は、限定的対人活動群、発展的対人活動群、全般的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。全般的活動群は、自主的勉強群、消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

学業満足において、限定的対人活動群は、自主的勉強群よりも有意に得点が低かった ($P<.05$)。発展的対人活動群は、自主的勉強群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。ヴァーチャル活動群は、自主的勉強群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。自主的勉強群は、発展的対人活動群、ヴァーチャル活動群、消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。消極的活動群は、自主的勉強群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。

不安において、限定的対人活動群は、自主的勉強群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。発展的対人活動群は、消極的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。自主的勉強群は、限定的対人活動群、消極的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$)。消極的活動群は、発展的対人活動群、自主的勉強群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

以上のような結果から次のようなことがいえる。限定的対人活動群、発展的対人活動群と

全般的活動群のそれぞれは、大学生生活において色々なことに興味を持ち積極的に取り組む傾向にある。友人との交流については、発展的対人活動群や全般的活動群が積極的にコミュニケーションを取りながら友人関係に満足をしている。学業に関しては、自主的勉強群が、興味をもったことを大学で学べていると満足している。消極的活動群は学業満足度が低く、大学生生活や将来への不安を抱えており、自主的勉強群や発展的対人活動群は、不安をあまり感じていない傾向にあった。

3. 4 大学生生活の過ごし方のタイプと対人関係意識との関連

対人関係に関する意識を検討するために用いたソーシャルスキル尺度 (6 下位尺度)、対人依存欲求尺度 (2 下位尺度)、友人とのコミュニケーション内容 (3 下位尺度) の信頼性を検討するために α 係数を求めた。ソーシャルスキル尺度に関しては、関係開始 (.87)、解読 (.86)、主張性 (.74)、感情統制 (.73)、関係維持 (.63)、記号化 (.65)、対人依存欲求尺度に関しては、情緒的依存欲求 (.80)、道具的依存欲求 (.67)、友人とのコミュニケーション内容に関しては、課題的コミュニケーション (.66)、情緒的コミュニケーション (.78)、コンサマトリー的コミュニケーション (.76) となり、ほぼ十分な信頼性が得られた。

表 7 にもとづき、大学生生活の過ごし方 6 群を独立変数、ソーシャルスキル尺度の 4 つの下位尺度の得点を従属変数として、一要因の分散分析をおこなったところ、関係開始 (F (5, 1045)=13.41, $p<.001$)、解読 (F (5, 1040)=7.79, $p<.001$)、主張性 (F (5, 1052)=5.16, $p<.001$)、関係維持 (F (5, 1044)=4.84, $p<.001$)、記号化 (F (5, 1043)=10.78, $p<.001$) において有意な主効果が見られたが、感情統制 (F (5, 1043)=1.32, n.s.) において主効果は有意でなかった。

LSD 法による多重比較の結果からは、次のようなことがわかった。関係開始に関して、発展的対人活動群は他の 5 群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。限定的対人活動群と全般的活動群は、ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かつ

表 7 大学生生活の過ごし方 6 群におけるソーシャル・スキル尺度の得点

	関係開始		解読		主張性		感情統制		関係維持		記号化	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
限定的対人活動群	3.33	0.99	3.66	0.81	2.92	0.88	2.79	0.96	3.84	0.60	3.66	0.71
発展的対人活動群	3.79	1.03	3.89	0.72	3.18	0.83	2.74	0.88	3.94	0.62	3.83	0.77
ヴァーチャル活動群	2.73	1.13	3.25	0.82	2.75	0.78	3.09	0.99	3.64	0.65	3.29	0.77
自主的勉強群	2.96	1.05	3.48	1.00	3.00	1.00	2.91	0.97	3.78	0.69	3.42	0.80
消極的活動群	2.96	1.04	3.38	0.88	2.75	0.91	2.83	0.84	3.65	0.67	3.34	0.83
全般的活動群	3.34	0.83	3.65	0.81	3.17	0.81	2.81	0.91	3.84	0.67	3.73	0.69

た ($p<.05$).

解説に関して, 発展的対人活動群と限定的対人活動群は, ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 全般的活動群はヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$).

主張性に関して, 発展的対人活動群は限定的対人活動群・ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 全般的活動群はヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 限定的対人活動群は消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 自主的勉強群はヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$).

関係維持に関して, 発展的対人活動群と限定的対人活動群は, ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 全般的活動群は消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$).

記号化に関して, 発展的対人活動群・限定的対人活動群・全般的活動群は, ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$).

以上のことから, ソーシャルスキルが最も高いのは発展的対人活動群であり, 限定的対人活動群・全般的活動群はそれをわずかに下回るレベルのソーシャルスキルを示していることがわかった. それに対して, ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群のソーシャルスキルは低いことが明らかになった. 発展的対人活動群・限定的対人活動群・全般的活動群に共通しているのは, 友人・クラブ・サークルなどに関する対人交際の時間が多いことであり, そうした活動を通して, ソーシャルスキルも磨かれていくのではないかと考えられる.

次に, 表8にもとづいて, 大学生生活の過ごし方6群を独立変数, 対人依存欲求尺度の2つの下位尺度の得点を従属変数として, 一要因の分散分析をおこなったところ, 情緒的依存欲求 ($F(5, 1046)=9.82, p<.001$)と道具的依存欲求 ($F(5, 1047)=5.74, p<.001$)において有意な主効果が見られた.

LSD法による多重比較をおこなった結果, 次のようなことがわかった. 情緒的依存欲求に関して, 発展的対人活動群と限定的対人活動群は, ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 消極的活動群は, 自主的勉強群・ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$). 全般的活動群は自主的勉強群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$).

道具的依存欲求に関して, 自主的勉強群は限定的対人活動群・ヴァーチャル活動群・発展的対人活動群・消極的活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$). 消極的活動群は限定的

表 8 大学生生活の過ごし方 6 群における対人依存欲求の得点

	情緒的依存欲求		道具的依存欲求	
	平均	SD	平均	SD
限定的対人活動群	3.74	0.87	3.88	0.68
発展的対人活動群	3.71	0.85	3.78	0.65
ヴァーチャル活動群	3.17	1.14	3.86	0.76
自主的勉強群	3.20	1.04	3.51	0.87
消極的活動群	3.45	0.93	3.71	0.75
全般的活動群	3.50	0.92	3.71	0.76

対人活動群よりも有意に得点が低かった ($p<.05$).

以上の結果より、限定的対人活動群と発展的対人活動群は、情緒的依存欲求も道具的依存欲求も高いことがわかった。その一方で、ヴァーチャル活動群においては、道具的依存欲求は高かったが、情緒的依存欲求は低かった。自主的勉強群は、道具的依存欲求も情緒的依存欲求も低かった。発展的対人活動群と限定的対人活動群は友人・クラブ・サークルなどの対人交際を通じて、周囲の人たちとの間に適切な依存欲求を作り上げていると考えられる。それに対して、ヴァーチャル活動群は、他者からの心理的なサポートを求めないが、物質的なサポートを求めている。自主的勉強群は、他者からのサポートを求めず、自分一人でやっているという意識が強いことが伺われる。

次に、表 9 にもとづいて、大学生生活の過ごし方 6 群を独立変数、友人とのコミュニケーション内容の 3 つの下位尺度の得点を従属変数として、一要因の分散分析をおこなった。その結果、課題的コミュニケーション ($F(5, 1040) = 8.80, p<.001$)、情緒的コミュニケーション ($F(5, 1042) = 13.68, p<.001$)、コンサマトリ的コミュニケーション ($F(5, 1044) = 9.64, p<.001$) において有意な主効果が見られた。

LSD 法による多重比較の結果、次のようなことが明らかになった。課題的コミュニケーションに関して、全般的活動群・発展的対人活動群・限定的対人活動群は、ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

情緒的コミュニケーションに関して、限定的対人活動群・発展的対人活動群・全般的活動群は、ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。コンサマトリ的コミュニケーション (友人との会話自体の面白さを重視する価値観にもとづくコミュニケーション) に関して、限定的対人活動群・発展的対人活動群・ヴァーチャル活動群は、自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

以上のことから、限定的対人活動群と発展的対人活動群は全てのコミュニケーションをお

表9 大学生生活の過ごし方6群におけるコミュニケーション内容の得点

	課題的コミュニケーション		情緒的コミュニケーション		コンサマトリーのコミュニケーション	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
限定的対人活動群	3.60	0.76	3.72	0.85	4.18	0.68
発展的対人活動群	3.70	0.72	3.63	0.91	4.19	0.69
ヴァーチャル活動群	3.33	0.82	3.18	0.93	4.08	0.79
自主的勉強群	3.29	0.91	3.14	0.98	3.80	0.98
消極的活動群	3.31	0.82	3.31	0.94	3.83	0.85
全般的活動群	3.74	0.74	3.63	0.79	3.98	0.75

こなっているのに対して、自主的勉強群においては全てのコミュニケーションが少ない傾向にあることがわかった。発展的対人活動群・限定的対人活動群，自主的勉強群に見られるこれらの傾向は，対人依存欲求において見出された結果と一致していた。発展的対人活動群と限定的対人活動群においては，友人とのコミュニケーションは円滑であるのに対して，自主的勉強群では友人とのコミュニケーションは少ないと考えられた。

〔都筑 学〕

3. 5 大学生生活の過ごし方のタイプと時間的展望との関連

目標意識尺度の信頼性を検討するために α 係数を求めたところ，将来への希望 (.88)，将来目標の有無 (.85)，時間管理 (.83)，計画性 (.77)，将来目標の渴望 (.74)，空虚感 (.73)となり，十分な信頼性が得られた。

表10にもとづき，大学生生活の過ごし方6群を独立変数，目標意識尺度の6つの下位尺度得点を従属変数として，一要因の分散分析をおこなった。その結果，将来への希望 (F (5, 1025)=7.69, $p<.001$)，将来目標の有無 (F (5, 1037)=12.27, $p<.001$)，時間管理 (F (5, 1034)=5.79, $p<.001$)，計画性 (F (5, 1045)=5.32, $p<.001$)，将来目標の渴望 (F (5, 1036)=2.53, $p<.05$)，空虚感 (F (5, 1045)=6.90, $p<.001$)において有意な主効果が見られた。

LSD法による多重比較をおこなったところ，次のような結果が得られた。将来への希望に関して，発展的対人活動群・自主的勉強群・全般的活動群は，ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。限定的対人活動群は消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

将来目標の有無に関して，自主的勉強群は他の5群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。全般的活動群はヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。全般的活動群は，

表 10 大学生生活の過ごし方 6 群における目標意識尺度の得点

	将来への希望		将来目標の有無		時間管理		計画性		将来目標の渴望		空虚感	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
限定的対人活動群	3.00	0.71	3.28	0.90	2.85	0.82	2.76	0.85	4.14	0.62	2.92	0.82
発展的対人活動群	3.11	0.70	3.23	1.02	2.83	0.80	2.74	0.77	4.04	0.61	2.79	0.79
ヴァーチャル活動群	2.81	0.91	3.05	1.08	2.45	0.85	2.51	0.89	3.86	0.79	3.28	0.70
自主的勉強群	3.12	0.82	3.80	0.86	3.09	0.88	3.11	0.86	3.97	0.71	2.76	0.81
消極的活動群	2.76	0.74	3.13	0.93	2.87	0.80	2.80	0.83	4.05	0.66	3.11	0.84
全般的活動群	3.12	0.59	3.50	0.76	3.11	0.79	2.84	0.79	4.06	0.68	2.82	0.84

ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。限定的対人活動群は消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

時間管理に関して、全般的活動群は、限定的対人活動群・ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。自主的勉強群は、限定的対人活動群・発展的対人活動群・ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。消極的活動群・発展的対人活動群・限定的対人活動群はヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

計画性に関して、自主的勉強群は他の 5 群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。全般的活動群・消極的活動群・限定的対人活動群はヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

将来目標の渴望に関して、限定的対人活動群はヴァーチャル活動群・自主的勉強群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

空虚感に関して、ヴァーチャル活動群・消極的活動群は他の 4 群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

以上のようなことから、6つの群は次のような特徴を持っていることがわかった。限定的対人活動群は、将来目標を持ちたいと強く渴望していた。発展的対人活動群は、将来への希望を強く持っていた。ヴァーチャル活動群は、将来目標が少ないとともに将来目標を持ちたいという欲求も弱く、時間管理や計画性でも劣っていて、空虚感を強く感じていた。自主的勉強群は、将来への希望が強いとともに、将来目標を多く持っており、時間管理や計画性の点でも優れていた。消極的活動群は、将来への希望が弱かった。全般的活動群は、将来への希望が強いとともに、将来目標を多く持っており、時間管理の点でも優れていた。

〔都筑 学〕

3. 6 大学生生活の過ごし方のタイプと自尊心との関連

自尊心尺度の信頼性を検討するために α 係数を求めたところ、.84 という高い信頼性を示す結果が得られた。

表 11 にもとづき、大学生生活の過ごし方 6 群を独立変数、自尊心の得点を従属変数とした一要因の分散分析をおこなったところ、主効果が有意であった ($F(1,1022)=5.06, p<.001$)。LSD 法による多重比較をおこなったところ、発展的対人活動群は、限定的対人活動群・ヴァーチャル活動群・自主的勉強群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。全般的活動群・限定的対人活動群・自主的勉強群は、ヴァーチャル活動群・消極的活動群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

以上のことから、発展的対人活動群は最も自尊心が高く、全般的活動群、自主的勉強群・限定的対人活動群、消極的活動群、ヴァーチャル活動群という順に自尊心が低くなっていくことが明らかになった。

表 11 大学生生活の過ごし方 6 群における自尊心の得点

	平均	SD
限定的対人活動群	2.84	0.63
発展的対人活動群	3.05	0.63
ヴァーチャル活動群	2.61	0.75
自主的勉強群	2.86	0.75
消極的活動群	2.72	0.60
全般的活動群	2.93	0.53

〔都筑 学〕

3. 7 大学生生活の過ごし方のタイプと不定愁訴との関連

不定愁訴尺度の信頼性を検討するために α 係数を求めたところ、.76 という十分な信頼性を示す結果が得られた。

表 12 にもとづき、大学生生活の過ごし方 6 群を独立変数、不定愁訴の得点を従属変数とした一要因の分散分析をおこなったところ、主効果は有意でなかった ($F(1,1039)=0.45, n. s.$)。このことから、6 群において、不定愁訴を感じる程度に差がないことが明らかになった。

表 12 大学生生活の過ごし方 6 群における不定愁訴の得点

	平均	SD
限定的対人活動群	2.78	0.76
発展的対人活動群	2.72	0.84
ヴァーチャル活動群	2.77	0.74
自主的勉強群	2.75	0.79
消極的活動群	2.81	0.80
全般的活動群	2.89	0.76

〔都筑 学〕

3. 8 大学生生活の過ごし方 6 群における

1) 限定的対人活動群

時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションのうち, 何が限定的対人活動群の大学生生活充実度を規定するのかを検討した。時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションを説明変数, 大学生生活充実度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析をおこなった (表 13)。

フィット感 将来への希望, 将来目標の渴望, 解読, 情緒的依存欲求はフィット感に正の影響を与えていた。一方, 空虚感, 自尊心はフィット感の負の影響を与えていた。将来への希望, 将来目標の渴望, 解読, 情緒的依存欲求が高まるほど大学生生活に対するフィット感が高まるが, 空虚感, 自尊心が高まるほど大学生生活に対するフィット感が低下することが明らかとなった。

交友満足 将来への希望, 将来目標の渴望, 課題的コミュニケーション, コンサマトリーコミュニケーションは交友満足に正の影響を与えていた。一方, 主張性と不定愁訴は負の影響を与えていた。将来への希望, 将来目標の渴望, 課題的コミュニケーション, コンサマトリーコミュニケーションが高まるほど交友満足は高まるが, 主張性, 不定愁訴が高まるほど交友満足は低下することが明らかとなった。

学業満足 将来への希望, 感情統制, 情緒的依存欲求は学業満足に正の影響を与えていた。一方, 空虚感, 自尊心は学業満足に負の影響を与えていた。将来への希望, 感情統制, 情緒的依存欲求が高まるほど学業満足は高まるが, 空虚感が高まるほど学業満足は低下することが明らかとなった。

不安 時間管理, 将来目標の渴望, 空虚感, 不定愁訴は不安に正の影響を与えていた。一方, 将来への希望, 将来目標の有無は不安に負の影響を与えていた。将来目標の渴望, 空虚感, 不定愁訴が高まるほど不安は高まるが, 将来への希望, 将来目標が高まるほど不安は低下することが明らかとなった。

表 13 限定的対人活動群における重回帰分析の結果

		大学生生活充実度			
		フィット感	交友満足	学業満足	不安
時間的展望	将来への希望	0.22**	0.30**	0.17*	-0.38**
	将来目標の有無	0.07	-0.09	0.10	-0.25**
	時間管理	0.05	0.04	-0.06	0.14**
	計画性	-0.03	0.09	0.03	-0.07
	将来目標の渴望	0.11*	0.12*	-0.01	0.16**
	空虚感	-0.33**	-0.06	-0.16*	0.20**
ソーシャル スキル	関係開始	0.01	0.08	-0.06	-0.05
	解読	0.13*	0.05	0.03	0.04
	主張性	0.02	-0.12*	-0.03	-0.03
	感情統制	0.03	0.04	0.13*	-0.05
	関係維持	0.07	0.00	0.11	0.02
	記号化	-0.04	0.11	-0.13	0.06
他者依存欲求	情緒的依存欲求	0.16**	-0.03	0.16*	0.03
	道具的依存欲求	0.04	0.07	-0.05	0.00
自尊心		-0.18**	-0.07	-0.02	0.05
不定愁訴		-0.06	-0.12*	-0.03	0.13**
友人とのコミュ ニケーション	課題的コミュニケーション	0.07	0.17**	0.00	-0.05
	情緒的コミュニケーション	-0.06	0.02	-0.03	0.10
	コンサマトリーの コミュニケーション	-0.03	0.12*	0.07	-0.07
重決定係数 (R ²)		0.35**	0.39**	0.16**	0.55**
				*p<.05	**p<.01

2) 発展的対人活動群

時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションのうち, 何が発展的対人活動群の大学生生活充実度を規定するのかを検討した. 時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションを説明変数, 大学生生活充実度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析をおこなった (表 14).

フィット感 情緒的コミュニケーションはフィット感に正の影響を与えていた. 一方, 空虚感¹はフィット感に負の影響を与えていた. 情緒的コミュニケーションが高まるほどフィット感²は高まるが, 空虚感が高まるほどフィット感³は低下することが明らかとなった.

交友満足 関係開始と課題的コミュニケーションは交友満足に正の影響を与えていた. 一方, 将来目標の有無, 空虚感, 解読は交友満足に負の影響を与えていた. 関係開始と課題的コミュニケーションが高まるほど交友満足は高まるが, 将来目標と空虚感が高まるほど交友満足は低下することが明らかとなった.

学業満足 空虚感⁴は学業満足に負の影響を与えていた. 空虚感が高まるほど学業満足が低下することが明らかとなった.

不安 不定愁訴は不安に正の影響を与えていた。一方、将来への希望、関係開始は不安に負の影響を与えていた。不定愁訴が高まるほど不安は高まるが、将来への希望と関係開始が高まるほど、不安は低下することが明らかとなった。

表 14 発展的対人活動群における重回帰分析の結果

		大学生生活充実度			
		フィット感	交友満足	学業満足	不安
時間的展望	将来への希望	0.15	0.12	0.06	-0.38**
	将来目標の有無	-0.05	-0.21*	0.01	-0.09
	時間管理	0.06	-0.05	-0.03	-0.03
	計画性	-0.07	0.09	0.13	-0.08
	将来目標の渴望	0.04	-0.15	0.06	0.12
	空虚感	-0.57**	-0.25*	-0.35*	0.16
ソーシャルスキル	関係開始	0.01	0.36**	0.10	-0.16*
	解読	-0.14	-0.16*	-0.04	0.01
	主張性	-0.05	-0.14	-0.02	-0.03
	感情統制	0.12	-0.09	0.09	0.03
	関係維持	-0.02	-0.08	0.02	-0.02
	記号化	0.14	0.03	-0.01	0.01
他者依存欲求	情緒的依存欲求	0.03	0.04	-0.07	0.11
	道具的依存欲求	0.05	0.06	-0.03	0.10
自尊心		-0.07	-0.08	-0.10	0.06
不定愁訴		0.04	-0.11	-0.10	0.13*
友人とのコミュニケーション	課題的コミュニケーション	-0.08	0.24*	-0.17	0.03
	情緒的コミュニケーション	0.25*	-0.04	0.20	0.01
	コンサマトリーのコミュニケーション	0.08	0.20*	0.01	-0.04
重決定係数 (R ²)		0.45**	0.43**	0.27**	0.65**

*p<.05

**p<.01

3) ヴァーチャル活動群

時間的展望、ソーシャルスキル、他者依存欲求、自尊心、不定愁訴、コミュニケーションのうち、何がヴァーチャル活動群の大学生生活充実度を規定するのかを検討した。時間的展望、ソーシャルスキル、他者依存欲求、自尊心、不定愁訴、コミュニケーションを説明変数、大学生生活充実度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析をおこなった(表 15)。

フィット感 将来目標の渴望はフィット感に正の影響を与えていた。一方、将来への希望、空虚感、解読はフィット感に負の影響を与えていた。将来目標の渴望が高まるほどフィット感が高まるが、将来への希望、空虚感、解読が高まるほどフィット感は低下することが明らかとなった。

交友満足 時間的展望、ソーシャルスキル、他者依存欲求、自尊心、不定愁訴、コミュニケーションが交友満足に与える影響については、モデルが有意ではなかった。

学業満足 時間的展望，ソーシャルスキル，他者依存欲求，自尊心，不定愁訴，コミュニケーションが学業満足に与える影響については，モデルが有意ではなかった。

不安 空虚感，不定愁訴は不安に正の影響を与えていた。一方，将来への希望，将来目標の有無は不安に負の影響を与えていた。空虚感，不定愁訴が高まるほど不安は高まるが，将来への希望と将来目標の有無が高まるほど，不安は低下することが明らかとなった。

表 15 ヴァーチャル活動群における重回帰分析の結果

		大学生生活充実度			
		フィット感	交友満足	学業満足	不安
時間的展望	将来への希望	-0.46*	-0.34	-0.18	-0.34*
	将来目標の有無	0.05	0.01	0.21	-0.25*
	時間管理	0.38*	-0.08	-0.01	-0.03
	計画性	-0.31*	0.09	-0.08	0.06
	将来目標の渴望	0.34**	0.08	0.06	0.06
	空虚感	-0.41**	-0.35	-0.22	0.29*
ソーシャルスキル	関係開始	0.29	-0.03	0.22	0.14
	解読	-0.49*	0.15	-0.56	0.16
	主張性	-0.15	0.03	-0.34	0.18
	感情統制	-0.13	-0.16	-0.21	-0.02
	関係維持	0.24	0.09	0.30	0.01
	記号化	0.04	0.02	0.13	-0.12
他者依存欲求	情緒的依存欲求	0.23	-0.08	-0.06	0.04
	道具的依存欲求	-0.18	-0.01	0.01	0.04
自尊心		0.23	-0.04	0.31	0.03
不定愁訴		-0.07	-0.13	0.10	0.22*
友人とのコミュニケーション	課題的コミュニケーション	0.03	-0.04	0.03	0.09
	情緒的コミュニケーション	-0.31	0.06	-0.31	0.13
	コンサマトリ的コミュニケーション	0.06	0.35	0.07	-0.24
重決定係数 (R ²)		0.45**	0.35	0.33	0.69**

*p<.05

**p<.01

4) 自主的勉強群

時間的展望，ソーシャルスキル，他者依存欲求，自尊心，不定愁訴，コミュニケーションのうち，何が自主的勉強群の大学生生活充実度を規定するのかを検討した。時間的展望，ソーシャルスキル，他者依存欲求，自尊心，不定愁訴，コミュニケーションを説明変数，大学生生活充実度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析をおこなった（表 16）。

フィット感 将来への希望はフィット感に正の影響を与えていた。一方，空虚感に負の影響を与えていた。将来への希望が高まるほどフィット感が高まるが，空虚感が高まるほどフィット感は低下することが明らかとなった。

交友満足 空虚感に負の影響を与えていた。空虚感が高まるほど交友満足が低

下することが明らかとなった。

学業満足 時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションが学業満足に与える影響については, モデルが有意ではなかった。

不安 将来目標の渴望は不安に正の影響を与えていた。一方, 将来への希望, 時間管理は不安に負の影響を与えていた。将来目標の渴望が高まるほど不安は高まるが, 将来への希望と時間管理が高まるほど, 不安は低下することが明らかとなった。

表 16 自主的勉強群における重回帰分析の結果

		大学生生活充実度			
		フィット感	交友満足	学業満足	不安
時間的展望	将来への希望	0.38*	-0.21	0.00	-0.57**
	将来目標の有無	-0.13	-0.10	-0.09	-0.04
	時間管理	0.05	0.04	0.30	-0.28*
	計画性	-0.06	0.08	-0.05	0.21
	将来目標の渴望	0.14	0.16	-0.18	0.23*
	空虚感	-0.38*	-0.40*	0.05	0.08
ソーシャル スキル	関係開始	0.04	0.03	0.12	0.01
	解釈	0.01	0.05	-0.54	-0.01
	主張性	0.10	0.08	-0.21	0.03
	感情統制	-0.04	0.11	0.11	-0.11
	関係維持	-0.02	0.16	0.02	-0.03
	記号化	0.21	0.20	0.24	0.13
他者依存欲求	情緒的依存欲求	0.06	-0.08	0.01	0.07
	道具的依存欲求	0.18	0.15	-0.14	0.00
自尊心		-0.21	0.01	0.15	0.07
不定愁訴		0.11	0.09	0.00	0.16
友人とのコミュ ニケーション	課題的コミュニケーション	0.02	0.06	0.04	0.01
	情緒的コミュニケーション	0.03	0.18	0.11	0.07
	コンサマトリーの コミュニケーション	0.19	0.10	0.12	-0.14
重決定係数 (R ²)		0.59**	0.57**	0.42	0.77**
				*p<.05	**p<.01

5) 消極的活動群

時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションのうち, 何が消極活動群の大学生生活充実度を規定するのかを検討した。時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションを説明変数, 大学生生活充実度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析をおこなった (表 17)。

フィット感 関係維持はフィット感に正の影響を与えていた。一方, 空虚感はフィット感に負の影響を与えていた。関係維持が高まるほどフィット感が高まるが, 空虚感が高まるほどフィット感は低下することが明らかとなった。

交友満足 将来への希望は交友満足に正の影響を与えていた。一方、解説は交友満足に負の影響を与えていた。将来への希望が高まるほど交友満足は高まるが、解説が高まるほど交友満足は低下することが明らかとなった。

学業満足 情緒的依存欲求は学業満足に負の影響を与えていた。情緒的依存欲求が高まるほど学業満足が低下することが明らかとなった。

不安 空虚感は不安に正の影響を与えていた。一方、将来への希望、将来目標の有無は不安に負の影響を与えていた。空虚感が高まるほど不安は高まるが、将来への希望と将来目標の有無が高まるほど、不安は低下することが明らかとなった。

表 17 消極的活動群における重回帰分析の結果

		大学生生活充実度			
		フィット感	交友満足	学業満足	不安
時間的展望	将来への希望	0.13	0.26*	0.09	-0.35**
	将来目標の有無	0.07	-0.16	0.16	-0.14*
	時間管理	0.14	0.15	0.02	0.13
	計画性	-0.17	-0.05	0.06	-0.06
	将来目標の渴望	0.08	0.13	0.01	0.11
	空虚感	-0.41**	-0.08	-0.09	0.25**
ソーシャル スキル	関係開始	-0.16*	0.06	-0.06	0.07
	解説	-0.10	-0.17*	-0.14	0.04
	主張性	0.11	0.07	-0.04	0.11
	感情統制	-0.07	0.11	-0.01	0.05
	関係維持	0.20*	0.14	0.16	-0.04
	記号化	0.00	-0.01	-0.03	0.06
他者依存欲求	情緒的依存欲求	-0.02	-0.06	-0.25*	0.12
	道具的依存欲求	0.00	0.11	0.03	0.04
自尊心		-0.06	-0.04	0.06	-0.11
不定愁訴		0.01	-0.08	0.16	0.11
友人とのコミュ ニケーション	課題的コミュニケーション	0.09	-0.10	-0.01	-0.02
	情緒的コミュニケーション	0.12	0.13	0.18	-0.11
	コンサマトリー的 コミュニケーション	-0.15	0.10	-0.01	0.04
重決定係数 (R ²)		0.39**	0.24**	0.20*	0.62**
				*p<0.05	**p<0.01

6) 積極的活動群

時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションのうち, 何が積極的活動群の大学生生活充実度を規定するのかを検討した。時間的展望, ソーシャルスキル, 他者依存欲求, 自尊心, 不定愁訴, コミュニケーションを説明変数, 大学生生活充実度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析をおこなった (表 18)。

フィット感 将来目標の渴望はフィット感に正の影響を与えていた。一方、空虚感は一

ット感に負の影響を与えていた。将来目標の渴望が高まるほどフィット感が高まるが、空虚感が高まるほどフィット感は低下することが明らかとなった。

交友満足 関係開始は交友満足に正の影響を与えていた。関係開始が高まるほど交友満足は高まることが明らかとなった。

学業満足 時間管理、将来目標の渴望、記号化は学業満足に正の影響を与えていた。一方、空虚感、関係開始、解読は学業満足に負の影響を与えていた。時間管理、将来目標の渴望、記号化が高まるほど学業満足は高まるが、空虚感、関係開始、解読が高まるほど学業満足は低下することが明らかとなった。

不安 不定愁訴は不安に正の影響を与えていた。一方、将来への希望、時間管理は不安に負の影響を与えていた。不定愁訴が高まるほど不安は高まるが、将来への希望と時間管理が高まるほど、不安は低下することが明らかとなった。

表 18 全般的活動群における重回帰分析の結果

		大学生生活充実度			
		フィット感	交友満足	学業満足	不安
時間的展望	将来への希望	0.21	0.28	0.00	-0.48**
	将来目標の有無	-0.16	-0.12	-0.05	0.07
	時間管理	0.15	0.04	0.51**	-0.27*
	計画性	0.01	0.22	-0.04	-0.03
	将来目標の渴望	0.25*	-0.10	0.27*	0.00
	空虚感	-0.35*	-0.12	-0.52**	0.17
ソーシャル スキル	関係開始	0.11	0.33*	-0.39**	-0.12
	解読	-0.09	-0.24	-0.28*	0.22
	主張性	-0.01	-0.19	-0.02	0.06
	感情統制	-0.04	0.08	-0.19	0.01
	関係維持	-0.13	0.04	-0.06	-0.06
	記号化	0.02	-0.08	0.42**	0.07
他者依存欲求	情緒的依存欲求	0.25	0.05	-0.01	-0.20
	道具的依存欲求	-0.19	0.08	0.04	0.17
自尊心		0.12	-0.01	-0.11	0.04
不定愁訴		-0.11	-0.21	-0.18	0.29*
友人とのコミュ ニケーション	課題的コミュニケーション	0.10	0.26	0.14	-0.15
	情緒的コミュニケーション	0.06	0.22	-0.04	-0.02
	コンサマトリー的 コミュニケーション	-0.11	-0.20	-0.18	0.19
重決定係数 (R ²)		0.54**	0.58**	0.52**	0.64**
				*p<0.05	**p<0.01

[金子泰之]

4. 総合的考察

本研究の目的は、次の2点であった。第1は、本学の学生における大学生生活の過ごし方のタイプを明らかにすることであった。第2に、大学生生活の過ごし方のタイプと大学生生活充実度、対人関係意識、時間的展望、自尊心、不定愁訴との関連性を検討し、そのような異なるタイプの学生の意識的な特徴を明らかにすることであった。

大学生生活の過ごし方のタイプには、限定的対人活動群、発展的対人活動群、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群、全般的活動群という異なる6つがあることがわかった。

限定的対人活動群と発展的対人活動群は、友人・クラブ・サークルといった対人交際の活動時間が長い点で共通していたが、全体的な活動時間数に関して、発展的対人活動群の方が限定的対人活動群よりも2倍程度長く、発展的対人活動群はより幅広く活動している学生タイプだといえる。ヴァーチャル活動群はインターネット・マンガ・ゲームなどの活動時間が長く、対面的で直接的な人間関係よりもネットやゲームなどのヴァーチャルなメディアへの親和性が強い学生タイプだといえる。自主的勉強群は、授業外の勉強時間が長く、一人でコツコツと勉強するような学生タイプだといえよう。消極的活動群と全般的活動群は3つの活動時間の長さの割合がほぼ同じぐらいであり、バランスの取れた生活を過ごしている点で共通していたが、全体的な活動時間数に関して、全般的活動群の方が消極的活動群よりも4倍程度長く、全般的活動群は消極的活動群よりも活発に活動している学生タイプであるといえる。

大学生生活の過ごし方のタイプと大学生生活充実度、対人関係意識、時間的展望、自尊心、不定愁訴との関連性の検討から明らかになった、それぞれの学生タイプの特徴は、次のとおりである。

限定的対人活動群は、大学生生活の充実感が高いと同時に、将来目標を持ちたいという欲求も強かった。対人依存欲求も強く、友人との情緒的コミュニケーションやコンサマトリーのコミュニケーションも強いことから、少数の緊密な人間関係を取り結ぶことを望んでいると考えられる。

発展的対人活動群は、非常に充実した大学生生活を送っており、自尊心も将来への希望の意識も高く、自信を持って生活しているようである。周囲の人々とも、高いソーシャルスキルや適切な依存欲求によって上手に関係を取っていると考えられる。

ヴァーチャル活動群は、大学生生活に対する充実感が弱く、自尊心も低かった。将来目標が

少なく、かつまた将来目標を持ちたいという欲求も弱かった。時間管理や計画性の面で劣っていることが、そうした将来への志向性の低さにつながっているといえる。このタイプの学生は、ソーシャルスキルや情緒的な面での対人依存欲求やコミュニケーションが低く、そうした対人交際が不得手であるといえる。

自主的勉強群は、学業満足度が高い一方で交友満足度や大学生生活の不安は低く、学業中心の生活を過ごしていると考えられる。ソーシャルスキルや対人依存欲求や友人とのコミュニケーションは概してやや低く、時間管理や計画性は優れており、将来目標をしっかりと持ち、将来への希望を持って、一人でコツコツと勉強する傾向の強い学生であるといえる。

消極的活動群は、大学生生活への不安が高く、将来への希望が弱かった。ソーシャルスキルに関しては、相手に対して主張することが少ない傾向がみられた。このタイプの学生は、3つの活動を満遍なくこなしてはいるが、活動時間数が少なく、全体として活動エネルギーに乏しいといえる。

一般的活動群は、大学生生活の充実度は高い方であり、将来への希望も強く、時間管理も優れていた。このタイプの学生は、3つの活動の時間数が多く、精力的に学生生活を送っているといえる。

以上のように、6つの学生タイプは特徴的な意識を持ち、独特なやり方で大学生生活を過ごしていることがわかった。それぞれの学生タイプには、プラスの面とマイナスの面が含まれており、教育的な視点から見れば、それぞれに固有のサポートが必要となる。そうした点について検討を深めていくことが、今後の課題となるであろう。

文 献

- 1) 相川充・藤田正美 (2005) 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要第1部門 56, 87-93.
- 2) Benesse 教育研究開発センター (2009b) 放課後の生活時間調査報告書—小・中・高校生を対象に— 研究所報 Vol. 55.
- 3) 古谷嘉一郎・坂田桐子 (2006) 対面, 携帯電話, 携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果: コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して 社会心理学研究 22(1), 72-84.
- 4) 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究 15, 107-118.
- 5) 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010) 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 9, 1-14.
- 6) 竹澤みどり・小玉正博 (2004) 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究 52, 310-319.
- 7) 都筑学 (1999) 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部.

- 8) 都筑学 (2009) 中学校から高校への学校移行と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討— ナカニシヤ出版.
- 9) 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・岡田有司 (2010) 大学生の生活と意識に関する調査研究—生活管理能力や生活の規則性と健康意識，自己意識，時間的展望との関連— 中央大学保健体育研究所紀要 28, 1-19.
- 10) 都筑学・舟橋一郎・早川宏子・八島健司・早川みどり (2006) 大学生の大学生活への適応過程に関する研究 (9) —4 コホートの縦断的データの分析から— 中央大学保健体育研究所紀要 24, 1-19.
- 11) 都筑学・舟橋一郎・八島健司・早川宏子・村井剛・早川みどり・半澤礼之 (2009) 大学生の運動・スポーツ経験が身体・健康意識に及ぼす影響 中央大学保健体育研究所紀要 27, 1-18.